



恋する完璧少女

# アールに 熱い愛を こめて

© 001 Ni NETSUAI!

序章	入学式の朝、学園、中庭にて
第一章	ボーイズ・ビーツ・ガール
第二章	届く想い・届かぬ想い
第三章	腐れ縁な熱愛っ!?
第四章	それぞれの熱愛っ!
第五章	恋する完璧少女

# 登場人物紹介

Characters



しほうだに はつき  
**四方谷 葉月**

高等部一年生。学業優秀、スポーツ万能。交際の申し込みが後を絶たないため、自分と勝負して勝った相手と交際すると宣言している。

せな ゆかり  
**瀬名 由香里**

高等部一年生。運動神経抜群な委員長タイプ。正則とは小学校の頃からずっとクラスが一緒な腐れ縁の少女。

えま  
**絵麻・ホールズワース**

英国貴族の血を引くお嬢さま。葉月をライバルと見なしている。学業も運動能力も優秀。

つわぶき まさのり  
**石路 正則**

高等部一年生。華奢で女顔なため、強くなりたいと願う少年。

「ち、違うのか!? ——昨日買った雑誌の恋愛特集には、そう書いてあったのだが……」  
きよとん顔の少年に、なにか間違ったことを言ってしまったのだろうかどと狼狽えた様子で口ごもる。

（ぎ、雑誌……って、どんなこと書いてある雑誌なんだ……?）

ティーンの子向け雑誌なのだろう。初めての恋にどうしたらいいのか分からず、どうにか情報を得ようとしたのだろう。生真面目そうな顔立ちに似合わない恋愛情報満載な雑誌を買い求める彼女の姿を想像して、その一途な様に萌えてしまう。

「う、うん……確かに、え、えっちなこと、考えちゃう……けど……」

格好をつけて彼女に恥をかかせるわけにはいかない。実際、自分たちが女の子にエッチな妄想を膨らませているのは事実なのだから。恥ずかしさをこらえて頬を赤らめ答えると、仰向けに悩ましく四肢を投げ出した少女が安堵する。

「そ、そうか! じゃあ、いま正則も、わたしの胸触って……悶々しているんだな?」

「も、悶々……って……」

実際悶々どころの騒ぎではない。彼女に覆い被さった姿勢で間近にしどけない様を見せつけられ、ズボンの中が窮屈に疼いてしまっている。密室で自分に思いを寄せてくれている才色兼備な少女と一緒に、どこまで理性が保てるか分からない。

「じ、実は、女の子も結構、普段からえっちなことを、考えているんだぞ! 正則におっぱいを揉まれてしまつて、わたしもいますごくえっちな!!」

そんな彼に葉月は声を弾ませ、一夜漬けの知識を交えた言葉で誘惑してくる。

「それだけでなく……。正則のことを思うと、お腹の奥がキュウンとなって……、こんなことになってしまっているのに……」

とどめとばかりに、雑誌の受け売りよりもよっぽど過激な告白をしながら、黒ニーソを履く脚の太腿が露わになるほど捲れたスカートを、自分の指でさらに捲り上げる。

「——はうっ！ は、づき……!？」

ショーツの柄は清楚な白に蓐模様。表情の変化に乏しいクールな彼女の、秘められた内面に相應しい可愛らしさだった。

その蠱惑的に丸みを帯びた下腹部を包む小さな布地の股間が、じつとりと湿り気を帯びている。

（ぼ……僕のこと、思っ、て……こんな、なっちゃう……っ……）

頭がぐるぐるした。葉月が自分に情欲を抱いているという事実、嬉しさと興奮が許容を超えて膨らみ、理性が飲み込まれる。

「だ、だから……、正則が悶々してるなら、わたしですつきりしてくれて、構わないぞ。そうしてくれると、わたしは、嬉しいから……」

腰を浮かせて自分で下着を脱ぎ降ろしてゆく。

すべすべとした絹肌がなだらかな丸みを帯びる下腹が、しつとりと汗を滲ませる。

そのひとときわ小高く盛り上がった恥丘の下端から、ショーツの裏地との間に透き通った

ヌメリの糸を引き、薄桃に色づいた花弁が淫靡に綻びる。

（――!! あ、ああ……はづき……の、あそこ……）

初めて見る異性の秘所に目が釘付けになった。

普段はぴっちりとかわさっているであろう肉厚な大陰唇が、ねつとりと雫を纏って悩ましく緩んでいた。

その内側、充血に色づいた薄い肉花弁が断続的に小刻みな震えを催し、そのたびに濃厚な蜜をたたえた粘膜溝の奥から、とろとろと新鮮な雫が溢れてくる。

複雑に折り重なる陰唇花弁の上端で包皮から先端を恥ずかしそうに覗かせている小粒が、少年の視線を意識しているかのように脈打つ。

（こ……こんな、なってるんだ……!! 女の子の、つて! ピンク色で、ひくひく震えちやって……。あんなに、えっちに、濡れてるし……）

艶めかしく蜜を溢れさせるその様に、感動で胸が張り裂けそうだった。

鼓動が信じられないくらいに激しくなり、その音が耳鳴りのように鼓膜を震わす。

思わずまじまじと見つめてしまうと、さすがに葉月も恥じらったようにポッと頬を赤く染めて、目をそっと逸らす。その仕草が可愛くて、ますますドキドキしてしまう。

喉がからからで何度も生唾を飲み込みながら、掠れた声を振り絞る。

「そんな……性欲の処理みたいなこと、なんか、しない……から……」

拒まれたのかと葉月の顔が曇る。だが少年は上擦る言葉を続けた。

「葉月は、そんなんじゃないで、僕の、とても大切な人だから……。僕も葉月のこと思つて、こんなになっちゃったから……。だから、葉月と、するのは……」

股間が窮屈に膨らんだこんな状態では、説得力の欠片もないのではと思つてしまふ。

それに女の子に好きだと言われる経験も、女の子に気持ちを打ち明ける経験も、これまでの人生で初めてのことだ。

（こ、告白……つて、こんな、恥ずかしいんだ……）

その上、もし上手く出来なかつたらと思つて不安だし、そもそもこんな気持ちを、どんな言葉にして伝えればいいのか、さっぱり分からない。

どれほど上手な言葉を連ねたとしても、全然伝わらないような気さえしてくる。

（で、でも、葉月は、打ち明けてくれたんだっ！ 僕にっ!!）

耳鳴りがするほどにドキドキと心臓が高鳴つてしまつてゐる。

緊張と不安で、息が苦しくてたまらない。

こんな気持ちを乗り越えて、彼女も好きだと言つてくれたのだろうか？

言葉を途切れさせた自分を、瞬きもせず真剣な瞳で見つめてくる葉月に、もうこれ以上の不安な思いをさせては駄目だ。

どうせ恥ずかしいなら、いつそのこと思いつきり恥ずかしく格好悪く、自分の気持ちを彼女にぶつけてしまおう。なにもかも、さらけ出してしまおう。

制服のストラックスをもどかしい指で脱ぎ降ろした。

痛いほどに充血した強張り立ちが、ぶるんと勢いよく弾け出る。

「ぼ、僕だつてっ！ 好きだからっ！！ 葉月のことが、物凄く、大好きだからっ！」

「ふえ……？ は、あ……ああ……！！ ま、正則……ッ、い、いま、わたしのことを、す

……好き……って？ で、では、友達などではなく、わたしを恋人にっ！ わたしを、恋人として、愛して、抱いてくれるのだな!? う、嬉しいぞ……っ！！」

むしゃぶりついてくる少年の細いがしつかりと引き締まった身体を抱き締めて、クールな少女が歓喜に打ち震えた。潤んだ切れ長の瞳から涙を溢れさせて瞼を閉じ、彼を受け入れようと腰を迫り上げてくる。

「葉月っ！ 僕、葉月が好きだからっ！！ 葉月を僕のものにするっ！」

応えようと正則もいきり立った勃起を突き出すのだが、

「——あ、あれ？」

経験のなさからか、怒張の切っ先は収まるべき部分に収まらず、彼女の股間をぬるりと滑ってしまう。

「ん……。ふあ……」

しどどに蜜濡れた花弁を捲られて、もどかしい甘美の喘ぎが漏れた。

こちらと誘うように彼女の腰がくねり、とろとろに潤んだ狭穴を探りやすくするのだが、（ど、どこだろう……!? 葉月の膣内っ、入れたいのにつ！）

焦れば焦るほど、ペニスはにゆるにゆると、秘裂をもどかしく滑るだけだった。



（なんで、上手く……ッ！ 葉月と、したいのにつ!!）

いきり立つ怒張が焦らされて、頭に血が昇るばかりだ。その少年を、なだめるように、彼女の指がくしゃつと少年の髪を撫でてくる。

「は、葉月……」

「大丈夫だ、正則。焦らなくても、こうしているだけでも、気持ち、いいから……」  
不慣れな笑みを淡く浮かべる。髪を絡ませるその指先が微かに震えていた。

（そ、そうだよ。葉月だって、初めてで不安なのに。僕がこんなに狼狽<sup>うろた</sup>えてちゃ……）

自分が導いてあげなくちゃ駄目だ。このままでは最低な初体験を彼女に経験させてしまう。舞い上がる心を落ち着かせようと息を整えたそのとき、

「ふあっ！ あ、ああ、そ……そこ……だ。まさ、のりい……!!」

まったく偶然だが、熱いヌメリに先端が埋まり込んだ。

「——!! ここっ！ は、葉月の……ッ!？」

せつかく鎮まりかけた胸の高鳴りが、これまでもにも増して弾み踊る。

だが上滑った焦りとは違うめくるめく高揚感が身体の奥から込み上げてくる。

「い、入れるからっ！ 僕っ!! 葉月の、この中につ!!」

めつくり腰を迫り出すと、ぬぷつと、温かなヌメリがキュッと絡みついてくる。

（これ、がっ！ 女の子の、中ッ!? すごい、とろとろで……。こんな、粘り着いて……。き、気持ちいい……。なんてっ!!）

愛液を溢れさせてヒクヒクと収縮する膣口の感触に、初めての感動で胸がいっぱいになった。もつと奥へと本能に導かれ、腰が迫り出す。

ぬちゅ、ぬぶ……と、進むほどに締めつけられる感触も初めてで歓喜に言葉もない。

「ああっ！ 奪ってくれっ、わたしをっ!!」

やはり同じく、恋した少年に初めてを奪われる喜びで彼女の美貌が緩む。

「く……、あ、ああああっ！」

だがすぐに、わずかに不安を孕んだその表情が強張り、喘ぎが切羽詰まった。

「は……づき……っ！ ん……ッ!？」

「ひあああ……っ!! だ、大丈夫、だから……ああっ！」

先端が埋まり込んですぐにわずかな抵抗を感じ、それ以上押し込もうとすると少女が顔をしかめ、身を固くしてしがみついてくる。

「——!! こ、これ……って!? ぼ……僕、葉月の初めてを、破ろうとしてるっ！ 葉月としちゃうんだっ、僕ッ!!」

一瞬、彼女に苦痛を与えるのを恐れ、止めるべきかという考えが脳裏をよぎる。しかし葉月は自分に愛されることを喜んだのだ。

もしここでためらったりしたら、破瓜よりも痛い傷を彼女の心に刻んでしまう。

「痛いけど……ごめんっ！」

なによりも、自分が彼女と一つになりたい。

抵抗感を突き破って、怒張した切っ先を葉月の奥へとめり込ませる。

「嬉しい、痛み……っ、だからっ!! はぐう……ンッ! ひい、ああああッ!!」  
これまでの煮えきらなさを払拭するように力強く挿入してくる彼に喜び震える。

それでも純潔の薄膜を破られる痛みは激しくて、葉月はか細い悲鳴を迸らせて少年にしがみついてくる。

「入って、くるっ!! 正則の……わたしの、なかった、い、いっばいっ! あ、あああっ!!  
うれひい……っ、まさのりに、いっばいに、されてるうっ!」

それでも深くまで押し進むほどに、込み上げる悦感が破瓜の痛みを上回ってゆくようだった。キツキツに狭い彼女の秘穴がはち切れそうに充血した幹をきゅん、と何度も何度も圧迫してくる。

（葉月の、なか……すごいヌルヌルして……、僕の、締めつけてくるっ!! 女の子の、膣内っ! こ……こんなっ、き……、気持ちイイッ!!）

抱き締めた背中の自分よりも細くしなやかな感触が愛おしかった。

密着した胸と胸の間で溶けるように柔らかく拉げながらも、ぼわぼわと弾力的に押し返してくる美乳が心地よい。

だがなによりも、初めて挿入した女性の膣内の、たっぷりな潤みに満ちて怒張全体を包み込みながら熱烈に締めつけてくる感触は、これまで経験したどのような感触よりも素晴らしく、比べられるものなどないほどに気持ちいい。

敏感な部分と部分をつなぎ合わせ、止めどなく沸き上がる歓喜のなかで、彼女と自分の心までもが溶け合っただけの状態で、さらなる快感を求める衝動が膨れ上がる。

「はづき……。僕、もう……。動く、から……」

ただ挿入しているだけの状態に、さらなる快感を求める衝動が膨れ上がる。

まだ破瓜の痛みが癒えないだろう葉月を氣遣うが、彼女も昂ぶりに蕩けた瞳を潤ませて言葉にならぬ喘ぎと共に頷く。

「ふうああああ……。あああつ！」

正常位に抱き締めたまま、はやる心に突き動かされるように腰を繰り出すと、悩ましい嬌声を迸らせて葉月が身をくねらせる。

「ひゃうんっ！ ふわあつ！！ は、あああつ！ い、きもち、いイ……。ツ！！ なか……。わたしの、なか、あ、まさのりの、掻き回して……。くあはあああ——っ！」

ぬちゅぬちゅと、彼女の奥から溢れ出す雫の量が増し、擦れ合いに淫靡な響きを奏で始めた。静まり返った授業中の校舎。遠くにどこかの教室のざわめきが微かに聞こえるなか、二人だけで誰も訪れぬ資料室で愛を交わらせる。

「ぼくもっ、す、すごく……。気持ち……。イイっ！ 葉月の、中あつ！！ よかったっ！ 僕、葉月と、出会えてっ！！ 葉月を、好きになれてっ！！ はうっ、ああああああつ！！」

「わ、わたしも……。だっ！ こんな……。気持ちッ！！ はじめてっ！ 正則に、出会えてっ！！ 好き、という思いを……。っ！ ふああつ！！ あうっ、あはあああ——っ！」



案の定、正則は困った顔でおろおろと戸惑う。

「ねえ、やっぱり葉月とつきあう気なんでしょ？ そしたらいままで通り、あたしと友達同士でつきあうなんてことも出来なくなるし……。あたしのことは、捨てるのね？」

我ながらちよつとやりすぎかな？ と思うがもう止まらない。上目遣いでしょんぼりと涙ぐんでみせると、女顔の少年が靦<sup>てきめん</sup>面に狼狽する。

「そんなことないってばっ！ 恋人とか、そういうの関係なしに由香里とはずっと友達なことに変わりはないしっ!!」

振った女とそのあたも平然と交友関係が続けられると思っている、そのおめでたさに呆れてしまうが、そんなお人好しなところが愛おしくもある。

「きちんと答えを出せない僕が悪いんだけど……。でも、由香里のことも葉月のことも、どちらも大好きで、失いたくなくて、だからまだ、僕……」

いままでもてたことなどない彼にとっては一大事なのだろう。

部屋の床にしゃがんで頭垂れるその頭を、ベッド上からぼんぼんと撫でてやると、少し潤んだ眼差しでハッと見つめてくる。――下腹の奥がきゅうんとなった。

（しかし、あたしも葉月も失いたくないって、結構欲張りなこと言うわよね、正則って。優柔不断なんだか大物なんだか、まったく……。結局、葉月が言ってたみたいに二人ともカノジョに、されちゃったりして……）

あのときは聞いた瞬間、とんでもないと腹が立ったが、葉月ともいっくらか打ち解け合っ

たいまでは何となくそれもありかなと思ってしまう。

もちろん、自分だけが正則の恋人になるのが何よりも嬉しいが、そのために葉月と気まぐずくなるのは確かに残念だ。

（どちらにしろ、正則の気持ち次第か……。あたしも葉月も、こいつにめろめろだもんね）  
彼に求められたら自分は拒めないだろう。艶やかな黒髪の少女も恐らく同じだ。

無言で少年の腕を引っ張り、ベッドの上の隣に座らせる。おずおずと気弱そうな眼差しで窺い見てくる正則に、由香里は寄りかかるようにして身体を押しつけた。

「いいわよ……。こういう結果になっても、あたしはそれを受け入れるつもりだから。正則は自分の気持ちを偽らないようにきちんと考えて答えを出せばいいよ」

「由香里……」

甘やかすお姉さん口調に、少年がするような眼差しを向けてくる。いい気分。

「けれど振られるにしろなんにしろ、きちんと答えが出るまではまだカノジョ候補なことは変わりないのよね？」

その頼りきった少年に、畏にかかった獲物を取り押さえるような笑みを向け、意味深な声で脅してみる。たちどころに彼の顔色が慌てふためく。

「あつ、そ、そうだ！ 飲み物持ってくるよつ!! 瀬……ゆ、由香里も喉渴いただろ!?  
——あうっ！」

急いで立ち上がり部屋から出て行こうとする。その後ろから赤いショートヘアの少女は

半ば体当たりのように彼に抱きついて引き留めた。

彼女を受け止めたまま少年はよろめいて部屋のドアに背中をぶつける。

彼の家族は出かけているが、万が一の邪魔が入らぬように由香里はそのドアノブの鍵をカチリと回す。立ったまま抱き合う体勢となった正則に、逃げたら承知しないわよと意味を込めた笑みを送って威嚇する。

「なんでこんな状況ではぐらかそうとするかな。普通だったら、男の子の方から押し倒すのが礼儀ってものじゃない？」

「それってどんな礼儀だよっ!! 別にはぐらかすとか……僕はただ、飲み物を……って、ちよつと、瀬名ッ!？」

往生際の悪いことを言っている間に、膝立ちで彼のズボンのジッパーを下ろしてしまった。途端に溢れ出てくる男の子の匂いにお尻をキュッと迫り上げてしまいながら、気を緩めると名字の方で呼んでくる幼なじみを目で叱る。

「なによ、正則だってきちんとこんなになっちゃってるじゃない……」

中に指を潜り込ませ引つ張り出すと、すでにギンギンに勃起したおちんちんが先端に開いた小さな口からとろとろとした雫をこぼしながら急な角度で脈打っていた。

「そうだけど、でも……」

でもなんだというのだ? ペニスがこんな状態になってしまって、しかもえっちしちゃったっていい女の子が自分の部屋で無防備にしているのに、何もしないつもりだなんて、



控えめな性格も大概にしろと思った。

ちよつと黒ずんだ赤に充血してゴツゴツの幹に筋を浮き立たせる。括れの上で蛇の頭みたいに先を尖らせた粘膜剥き出しな部分を見つめていると、居ても立ってもいられない気持ちに掻き立てられ、股間が熱く疼いてきてしまう。

（あれが、奥に当たると、気持ちよくなっちゃうんだ。気がおかしくなりそうなくらい……）

早く膣の中に迎え入れてしまいたい、その前に試してみたいことがあった。ちよつと恥ずかしいかなと思いつながら、ためらったらやる勇気が損なわれると、由香里はブラウスのボタンを外して前をはだけた。

背中を手を回してホックを外し、乱暴に引き抜くように青白ストライプのブラを脱ぎ取ると、その勢いに誘われて乳房が胸元から弾け出た。

「——おわっ!!」

窮屈な衣服から解放され奔放に揺れ続ける撓わな巨果実、少年の眼が釘付けとなった。逃げようなんて思っても、結局おつきいおっぱいの誘惑に勝てる男の子なんていないのだ。

「これで、気持ちよく、させちゃうんだから……っ!」

自慢の巨乳を両手で掴むと、由香里は左右の房をそれぞれ外に引き離した。密着して汗ばんでいた谷間にひやつとした空気が流れ込み気持ちいい。

その狭間へと正則の怒張を割り込ませ、左右から肉房を押し寄せて挟み込む。

「はうっ！ あ、おっぱい……そんな……」

カクンと少年の膝がへたり込みそうになる。気持ちよかったみたいだ。

由香里も、気持ちよかった。外気にも触れず感度が高まった箇所で、一段と脈打ちを激しくする太い男根が何倍にもたくましく感じられた。

「あは……すごい、本当に、おちんちん、おっぱいに挟まっちゃうんだ……っ！」

みっちり合わさった房と房の隙間からひよっこり顔を出した亀頭が、茹だつたようになつてゐる。先端でくっばりと鈴口が開いて、透明のおつゆをとめどなく垂れ流す。

そのねっとりとした濃さが、さつきよりずっと濃厚になつてゐる。

ぐびつと喉が鳴つた。ふわんと意識が弛み、次の瞬間にはそれを頬張つてゐた。

「かつ！ ふはぁあっ!!」

狂おしい喘ぎを上げて正則の身体が大きく打ち震える。

「ん……おひんひん、気持ちよふ、しゆる、はら……」

酸っぱいようなしよっぱいような、変だけどなんだが頭をぼーつとさせる味わいと香りが口一杯に広がつてゐた。

括れた溝を張り出した雁傘ごと何周も舐め回し、裏筋を尖らせた舌の先でくじつてやると、女の子がすすり泣くような声で正則が喉を鳴らす。

「ゆ、かり……お願い、す、座らせて……。脚が、もう……」

ドアに寄りかかつて身体を支えるのがやつとのおようだった。切なく顔をしかめて、でも

すごく気持ちよさそうに目を蕩けさせながら、彼は脚を小刻みに痙攣させている。

だからじゅぽじゅぽと、唾液とカウパーを混じり合わせる音を響かせて窄めた口から先っぽを出入りさせながら、ペニスを挟んだ柔房を捏ねるように上下させた。

「ほあ……っ！ ゆ、由香里っ!! アウッ! そんな、とこっ!!」

「ん……んむっ、あん……ンぐ……。はむ……ん」

汗ばんだ谷間でぬりぬりゆと擦り続けると、喘ぎが切羽詰まって固い竿肉が断続的に打ち震える。すごく気持ちいい証拠だ。口をいっぱい満たすむんむんした男の風味はどうしようもないくらい濃くなって、由香里の頭をお馬鹿にさせてしまう。

自分の指が乳房に食い込む感触まで、正則に揉まれたときみたいに気持ちいい。

試しに乳首を指の先で強く転がしてみる。

「はひいっ!」

電氣が走った。思わず咥えたおちんちんを甘噛みしてしまい、怒張幹をぎゅっとおっぱいで圧迫してしまった。

「——んううっ!!」

途端に、いままでで一番大きな脈打ちが男根を打ち震わせた。

（こ、これってっ!! で、出ちゃう……のっ!? あああっ!）

膣の中で感じた覚えがあるその脈動に期待が震え立った。

赤みがかった短い髪の頭に正則がしがみついていた。だから頬張った勃起の先っぽが、

もつと奥にめり込んでしまう。その仕返しにおっぱいの谷間をさらに寄せ、鈴口をちゅぽあ——つと勢いよく吸い上げてやる。

「か……はああつ！ で……出るっ!!」

彼の蠢きが一瞬止まった刹那、男根だけが激しい打ち震えに見舞われながら、その先っぽから、どびゅううっ！ と激しい白濁を由香里の口中にぶちまける。

「んぐああつ！ はぶううっ!! ん、んむあああつ！」

カウパーとは比べものにならない濃さの液体に喉を満たされ、噎せ返りそうになった。煮えたぎるように熱く、そしてその量の多さに収まりきらない雫が小さな唇から溢れ返って顔中に飛び散り、乳房にも淫靡な乳白色の水滴をへばりつかせる。

（あはあ……正則の、こんな、いっぱい……。あたしの、おっぱい気持ちよくて、出しちゃったんだあ……）

理性を溶解させる苦く饅<sup>す</sup>えた独特の風味に満足の笑みをだらしなく浮かべ、どぶどぶと注ぎ込まれるその熱液を喉を鳴らして無我夢中で飲み込む。

「ん……まら、いっひゃい出てくりゅ……。まひゃのりの、おいひい、おちゅゅ……」

もう発情がたまらなかった。口いっぱいにぶちまけられた白濁の味わいに膣穴が羨ましがり、お腹の奥から熱い雫がじゅん、じゅん、と溢れ続けて止められない。

もう下着がべちよべちよに汚れてしまっていた。女の股は穴が開きっぱなしだということを、否応なく思い知らされる。



ズンと、奥壺に行き着いた衝撃と共に、また軽くイッたのか熱い蜜液を噴きこぼして洞肉がキュウンと収縮した。

「く……あ、はあ……!! え、絵麻……あ」

根本までキツキツに膣を満たす勃起竿の感触に打ち震える。

端正な美貌をしどけなく蕩けさせながら、葉月は百合趣味な好敵手を手招いた。

「あ、ああ……ッ!! はづき、さんっ!」

嬉しさにぶわつと涙を溢れさせ、ツインテール少女が正則を跨いで黒髪娘のしなやかな肢体に抱きつく。

「は、ん……。ふあ……」

「んむ……。あふ……。はあ、あああつ!!」

桜色の唇を恐る恐る重ねながら、自分のものとは比べものにならないほど豊かに実った美房を揉み弄る。

「へはあつ! ふあ、あ……ンううっ!! ふあ……、あ……ンうっ!」

細い指先が腕を伏せたような膨らみを拉げて食い込み熟房を掻き乱すと、居ても立ってもいられないといった様子で背筋を波打たせた。

腰のくねりが大きくなり、勃起肉に掻き回される粘膜穴からにゅちゅにゅちゅ響く淫音が粘度を増した。

「あふう……え、ま……」

「お乳い、素敵れすわ……はじゆき、ひゃん……」

女の子同士舌を絡ませ合う唇から切ない喘ぎが零れ出す。

上擦った声が震えるたびに葉月の膣壁が切なげにうねり、小刻みな収縮で剛直した竿肉をキュンキュンと激しく締め付けてくる。

「ひあうっ！　ンッ、んんんンンンッ！！　はああっ！　あうんっ！！　はっ、あはああっ！」  
くねりだす葉月の腰に合わせて正則も下から突き上げるストロークを繰り返すと、紐で結び纏められた長い黒髪が跳ね踊り、喘ぎが悩ましさを増した。

（ホールズワースさんが、弄るから……ッ！　葉月の膣内ッ、こんな……エッチにつ！！）  
普段が無表情で、大概のことに動じない彼女だけに快楽に突き動かされる反応のすべてがエロくてたまらない。

自分だけで彼女をこれほどまで乱れさせられたかどうか分からない。

絵麻へのちよっとした嫉妬と、それ以上の感謝に決るような抽送が勢いを増す。

愛液にまみれた壁と節くれ立った竿幹の擦れ合いが、にじゅっ、ぐちゅっ、と粘った響きを奏でる。

溶け崩れそうな快楽にふと顔を上げると、目の前には葉月の身体をまさぐりながら喜びに浸る絵麻のスリムな身体つきの割に肉感的な尻が、揺らめくスカートの中に覗き見える。  
（——ホールズワースさんのお尻ッ。あそこも、もう……あんなにつ！！　葉月と、えっちなこととして、濡れちゃってるんだ……。触ったら、怒られるよな……）

大人びた黒のショーツが溢れ出る愛液で透けて、陰部がぱっくりと綻んでいる様子が分かっってしまう。

ツンと生意気に迫り上がった膨らみと、蕩けた股ぐらをまさぐりたい衝動に囚われるが、同性にしか愛情を抱けない彼女には、男に触れられるのは嫌悪でしかないだろう。

（こ、こんな……エッチなお尻、なのに……。女の子でないと、ダメ、なんて……ッ！）

ぽとぽと滴って来る発情の雫に手を伸ばしかけ、ためらっている、

「正則い……、あたし、もう……とろとろお……」

レズ女なんか相手にするなどばかりに、由香里までもが跨ってくる。

たつぷりと怒張を突き込まれて歓喜が渦巻いた女陰を、自分の両手でくぱーっと広げ見せつけながら、未だ治まらぬ愛液をだらだらと滴らせ顔の上に下ろしてくる。

「——んぶっ！ ゆ、由香里……ッ!!」

「ひゅはっ!! くうっ、あはあああ——っ!」

熱く煮崩れた陰唇が唇にむっちりりと密着した途端、小柄な肢体が打ち震えて、新鮮な牝液が、ぶじゅっ! と口中に噴き出される。

舌に粘り着く退廃的な甘さに、漂わせた手で小振りに引き締まった尻肉を驚づかみにし、ヒクヒク蠢く粘膜花弁を窄めた舌で無我夢中に穿り返す。

「はあああッ!! 舐められると、蕩けひやうんっ! ふあ、はわあッ!!」

女陰の間近で嗅ぐ由香里の発情臭に、意識が遠のきそうだ。



溢れ来る雫をいくら舐め取っても、粘膜の谷間はいつまでもぬるぬるにまみれ軟体動物のようにうねうねと蠢く。その奥で弛みきったヴァギナへと尖らせた舌先をほんの少し潜り込ませると、尻肉がキュッと引き締まって食い込んだ指先を締め付けてくる。

「ああ……、葉月さんのお乳、美しい……ですわあ……。気持ち、よいのです……ね？  
こんなに、乳首、立たせてしまつて……。舐めて、慰めて差し上げますわ……♪」  
やつと遂げられた思いに、もう絵麻の菌止めがきかない。

自分が弄るほどに快楽の反応を示してくれる葉月の身体が嬉しくて仕方がないようだ。

「へあつ!? だ、ダメ……だつ! わたし、もう、いっぱい……気持ち、よすぎあああ  
あつ!! これ以上、そんな、はああああ——つ!」

そんな絵麻をますます喜ばせ、電気に痺れたように黒髪娘が身を打ち震わせた。  
切羽詰まりながら、上気して蕩けた美貌が定まらぬ視線を漂わせる。

軽い絶頂を何度も繰り返し、そのたびに膣壁が波打って怒張を揺さぶりたてる。

すっかりと淫らになつてしまつた葉月の身体に、絵麻が女同士の愉しさを刻み込む。

「ほんな、おっひいおっふあいれすのに、感じやふいれすわね……。あむん、はむ……」

「ひゅわはつ!! はうつ! あ、らめ、お乳ッ!! くふああああつ!」

またしても、女性の快感を知り尽くした舌の蠢きに蕩けるような甘美を、薄桃色に充血した乳首へと注ぎ込まれ、ペニスを抽送される腰がガクガクと痙攣する。

「くつ! はうううつ!! 葉月のッ、膣<sup>なか</sup>ああああつ!!」

じゅぶじゅぶと愛液を泡立たせて擦れ合う浮き立つような快感に、葉月の身体が浮き上がるほど強い突き込みになってしまふ。

「ひああうっ！ やっ、ダメっ！！ また、キュっど、なつてしま……ふあああああつ！」  
端正な美貌が狂おしくしかめられ、許容を超えた快感を押しつけるように葉月の方から絵麻の唇を奪う。スリムな身体つきをよりほっそりと感じさせる膨らみの乏しい百合娘の胸を、乳首を弄ばれたお返しとばかりにブラウスの上から捏ね回す。

「やああつ！！ だめですおっぱいっ！ 恥ずかしいあはあああ——っ！！」

好きな相手に貧乳をまさぐられる恥ずかしさに言葉では拒もうとするが、小さい分だけ感度の高い乳房が快感を求めていますます葉月の手のひらに淡い膨らみを押しつけてしまふ。男に触れまいと膝立ちで浮かせていた尻が、すんと正則の胸の上に落ちて、しかも溢れた愛液で下着をくちよくちよにさせた股ぐらをぐりぐりと押しつけてくる。

「——ホ、ホールズワースさんがっ！ 僕の上でっ！！」

快楽の暴走が生み出したあり得ない状況に、少年の興奮が限界を突破した。

滅茶苦茶に由香里の秘部を舐め掻き乱し、ドクドクと脈打って肥大する男根を、速いストロークで葉月の膣奥にこれでもかと叩きつける。

「あ、あああ、あ、ああッ、らめっ、りやめええっ！ とろけ、お股とろけひゃふっ！！  
ふわっ！ ふあはあっ！！ へあああああ——っ！」

「はあああんっ！ 愛して、ますわあ、葉月、さんっ！！ あああはあああああつ！」



「正則いっ！ はあああっ！！ わ、わたし、んああああああ——ッ！ だ、だめっ  
!! いくっ！ い、いってしま……ふああああ——っ!!」

背筋を反り返らせて少女たちが打ち震える。

ぶじゅっ！ ぶじゅじゅっ!! ぷしやああ——ッ！

びしゅ——ッ！ ぷしゅしゅしやしやああああっ!!

じよばあああっ！ ぷしゅ、ぶじやじやつ!! びじゅぶじゅじゅ——ッ！

ガクガクと太腿を痙攣させてくねらせる股間から、失禁のように大量の絶頂蜜を三人とも申し合わせたように噴きこぼす。

「おおあああああっ!! んうふううつ！」

葉月の子宮壺に密着した亀頭へ熱くたぎった濁液を浴びせられ、キツく収縮する膣壁を極太の膨張が押し返した。

仰向けになった身体の上で、美少女が三人絶頂する淫らすぎる状況に尿道が破裂しそうな勢いで渦巻く塊が進った。

「ん……ひい……ああ……ッ！ ふああああっ!!」

——どびゅどびゅぶびゅっ！ びびゆるびゆるぶじゅじゅばあ——ッ!!

容赦ない勢いでぶちまけられる白濁に子宮を打ちのめされ、追い打ちの絶頂に葉月が背筋を仰け反らせた。

ガクンとスカートを跳ね上げ開帳させるニーソックスの両脚の狭間、目一杯に陰茎を啜

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**